アイヌ文学の生活誌

更科源蔵

NHKブックス

177

更科源蔵（さらしな・げんぞう）

1905年　北海道弟子屈町に生まれる
現　　在　アイヌ文化研究家，作家
主な著書　「アイヌと日本人」「歴史と民俗“アイヌ”」他多数

NHKブックス 177　　検印廃止

アイヌ文学の生活誌

昭和48年2月25日第1刷発行

著　者　更科源蔵
発行者　浅沼博
印刷　三秀舎
製本　石津製本
装幀　栃折久美子

発行所　日本放送出版協会
東京都渋谷区宇田川町41-1
郵便番号150 振替東京 49701

落丁本・乱丁本はお取替いたします

アイヌ文学の生活誌

更科源蔵

NHKブックス

177

© 1973 Genzo Sarashina

まえがき

これまでいろいろな人によって数多くのアイヌ文学、ユカラその他が紹介されて来た。しかしその多くはアイヌ語を日本語に置き換える作業であって、なぜそうした文学が必要とされて、生まれそして伝承され今日にいたったかについての解釈が、ほとんどなされないままに過されて来た。そのためそれらの文学が荒唐無稽の作り話として見過され、あるいは迷信の所産として一笑に附されたことが多く、従って正しい意味のアイヌ文化までが、低次元のものとして打ち捨てられてはいなかったか。

木や草に花が咲くのは、決してその美によって人間を喜ばせるためではなく、多くの種子を結実させて子孫を繁栄させるためであって、美しい花に棘があったり、未熟の木の実に毒があるということも、それにはそれだけの理由があるのであって、今日なおムダ花とかアダ花という言葉を使う人があるとすれば、それを使う人の常識の貧しさや思いあがりであるが、得て人間は自らの貧しい知識によって、他の姿を曲げて見たり勝手な批判をしたがるものである。とくに文化のちがった他の民族に対して、これと同じあやまちをおかしたことは、これまでの例をあげるまでもないばかり

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

か、同じ民族の中であっても都市と農村、農村と漁村というような生活環境のちがいからだけでも、相互の理解を欠くということは応々に見られる事実である。

近々百年にみたない僅かの時間の間に、世界のうちで北海道だけにしか残っていなかったアイヌ文化というものが、多分に思いあがった同化政策の中で、正しく理解されないままに急激に衰亡し去ったことは、同化政策としてはたしかに成功であったのかもしれないが、他に類の少ない文化を無批評に破壊し去った罪も、同時に負わなければなるまい。

明治の為政者の中には、学者を登用してその姿を記録させようと努力したものも、二、三にとどまらずあったが、その試みは常に散発的に終って、終始それを貫き通す政策は行なわれなかった。従ってアイヌ文化の探究は、常に一部の物好きな学者の片手間にゆだねられ、あるものは一地方に限られ、あるものは自分の専門の分野にだけ力点を置き、しかも近代的合理主義の立場から光を当てる関係上、北海道の自然の中に生きた人々の知恵や伝承を、のんきな作り話や迷信として片付けるあやまちをおかす傾向すらあった。

もちろん私もアイヌ文化の網目の節々のすべてを、丹念に探り得たものではない。ここではアイヌ文学の中で、神といわれ魔といわれて描かれている自然の中の、小さな昆虫や野鳥がなぜ大事な神として伝承され、ある樹木はなぜ意地の悪い魔物であったのか、そしてそれらを伝えた文学と呼

ばれるものは何であったのか、ただ私は信仰深い古老達に導かれて、暗い北海道の自然の中を歩いているうちに、それが迷信でも作り話でもなく、この奥深い自然の中で生きるための、重要な生活の教典であるということをおぼろげながら知ることができたのである。

そして祭事のときにうたわれるアイヌ歌謡の多くが、意味のない音群で形成されているのは何故なのか、それなのに小鳥達のうたう歌にどうして人語の意味があるのか、不思議なこの世的でないような光の当たっているこの世界は、今日は童話の世界としてより生きていないが、それにはそれだけの理由があったのであり、昔の人にとってむしろそのことがたしかな現実だったのである。このことが今日なお日陰の部分に置かれている日本古代の、理解しがたい問題にも、もし光を当てることにでもなれば望外の喜びである。

昭和四八年一月

更科源蔵

目次

歌う神がみ……九
カケス神の歌9／カッコー神の物語りと歌19／山鳩の歌24／雀の神謡と雲雀の歌27／梟神の歌と神謡31／カラスとカモメ神の歌41／シギの踊りと神謡46／白鳥の歌声48／水辺の鳥神達50／頬白鴨の歌53／鶴の舞い57

山から来る神がみ……六三
罰せられる熊神63／歌好きな熊神65／熊の子守唄68／天下る鹿の歌71／善悪両面をもつ狐神76／忘れっぽい獺神79／狩りをする大神84／火の神の使者88／鹿や海馬を騙す兎神91／子供を育てた鼠神96

海から来る神……九九
海から来る神99／海の荒神・海馬102／鯨を獲る鯱神106／鯨踊りの歌108／神魚の歌112／柳葉魚の神謡115／地震を起こす大魚118／沼貝の神謡120

大地に坐る神と魔……一二三
意地悪い木の神123／春楡媛の神謡125／始祖を生んだ木129／榛とドングリ拾いの歌132／根性の悪い胡桃の木136／守護神の桂の木139／トド松の歌142／柳の神謡145／木幣の神謡147

神である草達……一五一
名もない草花151／神の足153／福寿草物語155／蓬神の歌158／トリカブト神の神謡163／フキの唄168
小さな神と魔……一七一
バッタの神謡171／老人になるセミ173／クモ神の悪戯175／ハチの守神177／いやらしい蛇神180／きらわれ蛙182
天上の神がみ……一八五
雪をとばす神185／山上で踊る魔女187／あばれ雷神189／雲の歌192／神の目194／魔者に狙われる日の神196／月の影198
人びとの歌……二〇一
子守唄201／裁きの歌204／舟唄207／植物採集歌210／葦刈歌212／農耕歌214／杵搗歌218／酒造り歌221／木樵歌224／散文物語227

歌う神がみ

カケス神の歌　昭和五年の早春、屈斜路湖畔の小学校の教壇に立つことになった私は、子供のころ私の家で牧場番をしてくれたアイヌの人が、すっかり老い込んだ上に失明しているのに出逢い、慰めがてら毎晩のように遊びに行っているうちに、すっかり彼の話の魅力にとりつかれてしまった。

その話の中でミヤマカケスが雄弁な鳥神であるという話は、特に私の興味をひいた。それは昔人間が、魚を支配しているチェパッテカムイという神の機嫌をそこねたため、それまで毎年川底が黒くなるほど溯っていた鮭が、全然姿を見せないので、色を失った人々はいろいろ神様に頼んだり、お詫びもしたが一向に許してもらえない。そこで最後にカケスに頼んだところ、早速魚持神のところに出かけて、人間がお産をするときの身振りを、面白おかしく演技してみせたので、にがりきって怒っていた神様もやっと機嫌をなおして、魚の一杯つまった袋を出してくれた。それで再び川という川は、水の上まで鮭が盛り上がるほどのぼり、人間が助けられた。

だから人間の中でもしゃべることの下手な者は、この神様にたのんで、血の出るほど舌をつついてもらうと、上手にしゃべれるようになるものだといって、腹の底が見えるほど大きな口をあけて笑った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

そしてこの神様を捕えると家の中に飼っておき、冬の退屈なとき子供達がこれに踊りをさせて遊ぶのだともいった。それはカケスの頭の毛をつまんでぶらさげ

ユポ　タプカラ　キ　（兄貴踊りをおどれ）

サポ　ニセ　キ　（姉さんお酌をたのむ）

とうたうと、翼をひろげたカケスは、パサパサ、パサパサと羽搏（はばた）きクルクルとまわる。それを「サケ　ノエ　サケ　ノエ（酔った酔った）」といいながら床の上に寝かせ、

サカヨ　アンナー（喧嘩だ！）

といって、トンと床をたたくと、びっくりして飛びあがるのだといった。この歌は地方によって多少ちがいがあり、日高静内できいたのは、

お前の村の踊り　おどれ　おどれ

おやじの踊り　おどれ　おどれ

おっかの踊り　おどれ　おどれ

兄貴の踊り　おどれ　おどれ

姉の踊り　おどれ　おどれ

じさまの踊り　おどれ　おどれ

稗酒　のめ　のめ

粟酒　のめ　のめ

婆の酒　のめ　のめ

カケス

などとなかなか複雑である。

どうしてこの鳥にこんな伝承や歌がたくさんあるのだろうか。そればかりでなく北見の美幌ではこの鳥を送る（神送り）とき、熊送りや梟送りと同じように盛大にすることをきき、専門家に問いただしてみると「迷信さ」と軽く笑われた。しかし迷信などで盛大な祭をするなどということがあり得るだろうか、何か昔の生活と深いかかわり合いがあるのではないだろうか、私はかたくななまで古老達の信仰にこだわった。それで何度か美幌部落（コタン）を訪れてカケスの追跡をしたが、容易に謎は解けなかった。

ある老婆は「春にこの鳥が〝ヤーカラ　ヤーカラ（網つくれ　網つくれ）〟と啼いたら豊漁だし、山へ狩りに行って〝エタシコビ　エタシコビ（帰れ帰れ）〟と啼いている沢へは入るものでない。〝ヤイクシケ　ヤイクシケ〟（急げ　急げ）と啼いてる沢には熊がいるものだ」と教えてくれ、北海道の各地に広くうたわれながら意味のはっきりしない

イヤ　クークー　ネタロクン　チカプ
イヤ　クークー　カニコルカヤ

という鳥の祭歌はこの鳥を神送りするとき、うたうものだと教えられた。

また日高地方では川下人昔話の中で、川下人が海馬の虱をとってやるといって騙して、首肉を切り取って逃げると、カケスが「狭い谷に逃げろ」といったので、その通りして助かるが、真似をした川上人がカケスのいうことをきかず、広い谷に逃げたため捕って殺される話がある。

この鳥の舌は肉質なので鶯や猫の啼き真似などを上手にできるのであるが、どうしてこんなに多くの話があり、神とされるのか私の疑問は深まるばかりであった。

少し長くなるが、金田一京助博士が岩波文庫の『ユーカラ』の中で「漁猟の幸の女神の説話」として訳されている、――イヌサ　イヌサ――という繰り返しのある神謡を再録させて頂くと、

イヌサ、イヌサ、針仕事をのみ、事として、我在りしが、とある日、窓のうち、かげりて、我が目をあげて見やれば、おほ杯、その上に渡せる酒箸のうへを、漂はして、窓より（御酒の）届き来れるなりき。削花の著きたる酒箸が、詞の起首を、打ちほどき、詞の終末を、掛けつゝ、斯くなむ――

『大神よ、わが申さくを、つぶさに聞し給へ。アイヌラックル、にて我こそあるなれ。さて在りしに、わが郷、飢饉にて、わが人々、死ぬばかりになりたれば、わが食ふ物を、われ与へて食べしめ、食べしめて、われさへも、今は、堪へがた無し。たった僅かに残りたる穀物、それを以て御酒をわれ醸し、もって爾が神に乞ひまつる』

と、いふ声してければ、我立ちあがり、その杯を、我受け取りて、六つの行器、の中へ我あけて、横座へ据ゑ、さて在り在りしに、神々の嘉し給ふもことわりや、今こそ、酒の香、美しかをり、家の中に、満ちあふれたれ。奥へ我行きて、神嚢を、我取出し、神巾を、わが頭に頂き、巫道の撥を、我取り出し、それより、歌こそ、我が喉より、美しく調べ出づれ。人々を請ずる、消息のことばと、海づらのうへへ、出で行くに、歌のゆくさきざき、神々喜び賞づ。歌の半ばは、大空の上へ伝はりゆくに、（天上の）神々、喜び賞づ。歌の半ば、招宴の消息の詞と、山の奥地へ、伝はり行くに、（山の）神々、喜び賞づ。在る間ほどなく、それより、諸々の神々打ちつどふ。海上より、奥山より、打ちつどひ、大神たちの酒ほがひ、またく揃ひて開けたり。我装束をして、諸口の銚子を、胸高に乗り持ち、酒筵の間を、我斡旋す。楽しき酒ほがひ、諸神達、相共に開く。……

以上が漁猟の女神というカケス神の神謡の前半である、ここで前半の部分を少し解説しないと、後半がわかりにくい。

前半の出だしで「針仕事をのみ、事として、我在りしが」とある。これが人間であればわかるが、漁猟の幸の女神であるカケスという小鳥だということになると、われわれの常識では容易に納得しがたい。だがアイヌの信仰の中で小鳥というものの多くは、ふだんは天上の神の国（野獣になる神神の国は山奥、海獣の姿をする神々の国は沖合い）にあって、そこでは人間と同じように、女は刺繍をして日を送り、男は模様を彫刻する生活をこととし、夫婦生活もしていると考えている。だから神々が神謡で自らのことを物語るとき、針仕事をしているといった場合、それは女神であると知

れるわけである。

この女神のところへ酒をなみなみと満した盃に、人語を神々に通訳してくれる酒箸をのせて届け、人間界の飢餓をうったえるアイヌラックル（人間臭い神の意で半人神）とは、神がかりした巫者で、そうした人が昔は酋長であったろうと、知里真志保博士は推理する。

このアイヌラックルの盃を受けとって六つの酒樽に入れ、酒造りをはじめ、醱酵する香りが家の中に満ちると、女神のカケスは巫女の大事な道具をしまっている嚢から、呪術用の鉢巻や太鼓を取り出し、それらを身につけて人々や神々を招待する歌をうたったということは、あとで説明するが、これがこの神謡の中で最も重要なところで、現実にはカケスが木の枝に集まって、ギャーギャーと騒ぐことである。

こうして後半に入ってカケスの女神の招待で集まった神々の中で、部落の守神である梟神だけが、酒の中に女の髪が入っていたことを怒って目をつぶっていたとつづくが、これも梟は夜行性の鳥で日中は目をつぶっていることが多いからであり、女神がそれらの神々の間を提子（ひさげ）をもって、酒をつぎまわり、渚の女神や川口の女神達と一緒に舞いを舞いながら、鹿持ちの神や魚持ちの神に近寄って、その肩をほとほとと叩きながら、「どうか人間に鹿をおろしてやって下さい、魚をおろして下さい」とたのむと、それまで機嫌よくおどっていた鹿持ちの神が、急にムッとして怒りを面に現わして、「これまで人間のために随分私は沢山の鹿をおろしてやった、ところが人間共はあまり豊かなものだから、皮をはいで裸になった鹿を抱き合せて笑いものにしたり、木幣（イナウ）もくれないので鹿どもは皆泣き泣き帰ってくるので、人間どもにはもう鹿はやられない」といい、魚持ちの神もまた

「これまで随分魚をおろしてやったのに、人間どもは腐れ木でそれを突いたり叩いたりして殺すので、魚達は悲しがって皆泣きながら帰ってくる、だからもう人間がどんなに困ろうと、金輪際魚はおろしてやらない」

と口をそろえて言った。

この場合鹿の皮を剝いだ姿は人間の裸になったのに似ているから、神のおろしたものを侮辱したことになり、魚をとるとき頭を叩く棒は削り花のついたものを使うのが礼儀とされているからである。

要するにここでは人間界の飢饉は、神々のおろした鹿や鮭を粗末にしたり侮辱したのに原因していることを語られ、つぎは幸の女神であるカケスが、それにもめげずになお鹿持ちの神や魚持ちの神の肩を軽く叩きながら、

「そうは言うけれども神々よ、神というものは人間を援けてこそ、このように人間から酒を送られたりたのまれたりして、はじめて神として尊ばれているものではありませんか、腹立ちまぎれに人間を困らし人間を滅亡させたら、誰が私達を大事にしこんなに酒を送られましょう、さあさあそんなことをいわず、魚をおろしてやって下さい、鹿もおろしてやって下さい」

とやさしくさとすように言われたので、両方の神とも微笑をうかべて、

「姫神たちがあまり上手に踊るのでつい腹の立っていた私達だが、心がなごやかになったわい、さァ困るというなら鹿の入った大袋を庫から卸して、山の上にばらまきなさい」

と鹿持ちの神がいうと、魚持ち神もまた同調してくれたので

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c